
ご飯と噛み付き

madao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ご飯と噛み付き

【Nコード】

N4908R

【作者名】

m a d a o

【あらすじ】

この作品はとあるカップルの様子を嘘と編集で手直したノンフィクション作品である。（つまり完全なフィクション作品です。）

(前書き)

初投稿です。過度な期待はしないで下さい。

ここはとある学校のとある教室。
その中で、机に突っ伏している女生徒が一人。
セミロングの細い髪。整った顔立ちを大きな瞳。
普通に見れば、かなりの美少女であろう。
しかしその表情は、どこか不機嫌そうに頬を膨らましていた。

「・・・おなかすいたあああああああああああああああ
！」

直後、大音量で教室内に腹の音が鳴り響く。
不機嫌の理由は明確だった・・・。

「・・・あー、高橋。もう直ぐで昼休みだから我慢しろ・・・と
いうか授業中に女生徒が叫ぶ台詞じゃないだろ、それ・・・。」
担当教師も、思わずツツこんだ。
それにつられ、教室のいたるところからクスクスと言う笑い声が聴
こえてきた。
だが彼女は、そんな事を気にする様子も微塵も見せず、再び席につ
いた。

たかはしのぞみ
高橋望。

この学校で有名な変わり者である。

「・・・と言う訳で思わず叫んじゃったのですよ。」

そう言っ望は目の前におにぎりに齧り付いた。

「・・・なんと言うか、とりあえず衝動が押さえられなくなっても叫ぶのは止めなさい。」

どこと無く・・・と言うかどう見ても呆れた様子の男子がそう答え

た。
井口真・・・望とは幼稚園前からの付き合いで、いわゆる一つの幼なじみと言う奴だ。

だが真の返答が気に入らなかったのか、望は眉をひそめて叫んだ。

「何を言ってんの！食事は大切なんだよまーくん！」

「それはそうなんだろうけど・・・と言うかまーくんいつの止めい。」

「そう言っ望は軽いチョップを望に当てた。

「いーじゃんまーくん。可愛くて。」

「高校生にもなっってその呼ばれ方をする俺の身にもなれ・・・。」
「そう言っ望は、溜息を一つ吐いた。

「ダメだよまーくん。溜息をすると幸せが逃げちゃうんだよ。」

「原因が何を言うか。」

「ほら、おにぎり食べなよ。美味しいもの食べると幸せになるよ。」

「いや、それ俺が作ったやつなんだけど・・・。」

両手でおにぎりを持ちながら・・・と言う今時漫画やアニメで見れないような光景を見ながら真は思考する。

・・・一体全体どうしてこんなに食べて太らないんだろう、と。

朝からご飯を三杯たいらげて、その上

そう考えた直後、左手から鋭い痛みが走った。

「っ！」

何かと思ひ視線を落とすと、

・・・望が噛み付いていた。

「・・・何してんの？」

「ひまふぁにふぁふいふふえいふぁほははんはふえふぁふえふよ）
訳：今何か失礼なこと考えたでしょ？」

何故わかった・・・と内心で思うが、真は考えを放棄する。

今すぐ謝らなければ、自分の指が一本程無くなってしまいそうな予
感がしたからだ。

・・・というか、目の前に居る幼なじみからどす黒いオーラが放た
れているのを見れば、誰だって先ず謝るだろう。

普段温厚な分、切れた時のこいつは恐ろしい・・・と真は経験則で
わかっているのだ。

「ごめんなさい。」

「覚えておけ。女性の年齢と体重を気にする奴は処刑されても文句
は言えない。」

色々ツツコミ所満載だったし、キャラまで変わってるじゃん・・・
と思っただが、やはり恐ろしくて声に出せなかった。

「ごめんなさい。」

真はもう一度謝る。

「許さない。」

だが残念ながら、許してもらえなかった。

「・・・じゃ、どうしたら許してくれる？」

「誠意が見たいなあ。」

「・・・何でもしますから許してください。」

直後。

望の瞳が怪しく光った。

・・・こいつ、これが狙いだっただか・・・。

真がそう思った時にはもう遅かった。

「じゃあねえ・・・。」

望は真に何か耳打ちする。

聞き終わった後の真の顔は、明らかに焦ったような表情になってい

た。

「・・・マジか。」

「マジだよ。大マジ。」

「断つたら?」

・・・カプツ。(無言で真の手に噛み付いた。)

「OK。俺の指が無くなるってわけな。」

「・・・ふえも、ふああふんふおふひつふえふおひひほうふああふおふえ? (訳: でも、まーくんの指って美味しそうだよね) 」

そう言つと、望は真の指を舐め始めた。

ゾクゾクとした感覚が真の背中に走つた。

「うわっ！わかつた！りょーかい！」

焦りながらそう言つと、望は指を離すとにこやかな笑みを真に向けた。

その表情に、真の顔が少し朱が指す。

「えへへ。じゃ、は・や・く」

「・・・つたく・・・。」

真は頭を掻くと、手元のおにぎりを一つ掴み、一口。

その後、望に唇を重ねた。

・・・賢明な読者様ならわかつたであろうが・・・望のお願いとは「昼食を口移しで食べたい」と言つてももだった。

真は自身が含んだおにぎりを、望の口に流し込む。

・・・まあ、これまた賢明な方なら気付きそうではあるが・・・そこまでで終わるような訳が無かつた。

「ん〜」

「ん!?!?むぐつ!?!?」

望は真の口の中に、自身の舌を入れた。

「んー!?!?!んー!?!?!」

「んん・・・はん・・・。」

真は抵抗するが、望が彼の顔をしっかりと持っているので逃げられない。

「・・・ぷはあ・・・。」

「・・・。。。。。」

やがて唇が離れると、真は何かを言いたそうな表情になるが、

「えへへへ。ご馳走様でした。」

望の無邪気な笑顔を見ていると、何を言っても無駄と判断し、言葉を飲み込んだ。

「・・・仲が良いのは結構だが・・・。」

教壇の方から、洪い声が聴こえてきた。

「お前等ここが学校って事、忘れてないか？」

そう、お忘れの方も居るかも知れないが、今はまだ学校の昼休みなのだ。

たかはしのぞみ いぐちまこと
高橋望と井口真・・・。

学校でも有名な「変人バカップル」である。

この後二人はたっぷり説教されました。

(後書き)

感想をいただけるとありがたいです。グダグダになった感が否めない
い・・・!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4908r/>

ご飯と噛み付き

2011年10月8日21時04分発行